

課題番号 66

臨床病期 I 期 小型浸潤性粘液性肺腺癌の術後予後因子に関する研究

〔1〕組織

代表者：吉村 竜一

(岩手医科大学 呼吸器外科学講座)

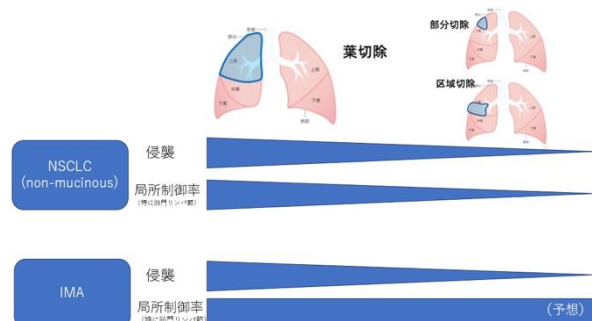
対応者：野津田 泰嗣

(東北大学加齢医学研究所)

研究費：物件費 1,580 円、旅費 98,420 円

〔2〕研究経過

浸潤性粘液性肺腺癌（Invasive mucinous adenocarcinoma: IMA）は比較的稀な組織型であり、リンパ節転移の頻度は低い一方、経気道的肺内転移を伴い進展していくことが知られている。このような腫瘍学的な特徴をもつものの、小型の IMA に対して縮小手術を行う妥当性については未だ十分なエビデンスが得られていない。



本研究では、臨床病期 I 期の小型 IMA 切除例を対象として、標準手術（肺葉切除+肺門縦隔リンパ節郭清）と縮小手術の予後を解析し、小型 IMA に対する縮小手術の妥当性を検討する。IMA は比較的稀な組織型であるため、多施設共同後ろ向きに症例集積を予定している。現在、参加施設より順次症例登録を進めており、データ固定後に解析を開始する予定である。

これまで研究打ち合わせ（ミーティング）を約3ヵ月に1回程度の割合で開催した。ミーティングのメンバーは研究者・分担者のほか、呼吸器外科医師のコアメンバー計6名で行い、研究の進捗状況の確認および実施計画について話し合われた。

〔3〕成果

（3-1）研究成果

本年度は、以下に示す研究成果を得た。

まず第1に、パイロット調査として岩手医科大学附属病院で、臨床病期 I 期 IMA のため手術を実施された症例について、術後成績を肺葉切除群、縮小手術群に分けて術後5年間における生存期間解析を行った。その結果、症例数が少ないものの、肺葉切除群の全生存率：87.5%に対して縮小手術群の全生存率：66.7%($p=0.29\%$)と有意差は認められなかった。

第2に、上記症例群において病理学的因子（空域内進展、肺内転移、腫瘍径、リンパ管浸潤など）のデータ整理を進め、予後因子解析に向けたデータベース構築を完了した。

（3-2）波及効果と発展性など

上記結果は研究の一部であり、今後は多施設の症例を集積して解析予定である。本研究により臨床病期 I 期小型 IMA における術後予後因子および縮小手術の妥当性が明らかとなれば、本疾患に対する私的術式選択の一助となることが期待される。本研究成果は、IMA に特化した外科治療戦略の構築に寄与し、将来的には診療ガイドラインや臨床意思決定への反映が期待される。

さらに、本研究で得られた知見は、IMA における再発リスク層別化の基盤となる可能性があり、今後の前向き研究立案にもつながることが期待される。

〔4〕成果資料

今年度中に本共同研究で研究された学会発表、論文発表等はない。